

最近はクリストフに魔法の基礎や応用を叩き込まれたおかげで詠唱破棄魔法も様になってきた。ボクの得意な魔法は火属性。一番得意な火属性の魔法の威力を上げたり構築速度を上げる為には火の特性をしつかり勉強しろ、とクリストフは言っていた。だからクリストフから火の特性について色々と学んだ。

火は可燃物と言われる物と酸素があり尚且つ可燃物が燃えるだけの温度が必要だとクリストフは言っていた。

そしてこの3つの要素を魔力が代用することで火属性の魔法を行使することができると言う。それに酸素はボクたちが呼吸して吸い込んでいる空気と言う物の中に含まれていると言っていた。さっぱり分らないよ。

それはそうとダンジョン内で現れたランクDの魔物であるリトルタウロスが現れたので火属性の魔法を撃つ。

「ファイアランス！」

「ブモooooooooooooッ！」

牛の頭に人間の体を持ったリトルタウロスの胸にボクのファイアランスが直撃したけどあまりダメージを受けていない様に見える。

「エアランサー！」

スパンツとリトルタウロスの首が飛ぶ。ペロンの撃った風属性の魔法だ。

「ペロンは風の特徴をよく理解しているようだね。それに比べカルラは火の特性をまだ理解していないのがよく分かるよ」

くつ、ペロンはクリストフの言うことをちゃんと理解できるほど優秀なのは分かっていたけど、ボクはまだまだだ。

「じゃあ、そのリトルタウロスを骨一つ残らないように燃やしてみようか」

「え、……これを？」

「そう、これを消し炭にしてね」

むむむ。やってやろうじゃないのっ！

この牛もどきを燃やすイメージを……たしか火は赤色、黄色、青色の順に温度が高くなるって言うていたわね。火なら赤色や黄色を思い浮かべるけど青色って何よ！？

「燃え上れ炎よ！」

イメージだ、この牛もどきを消し炭にするんだ。青い火、青い火、青い火、青い火、青い火、青い火、青い火……。

何で青くならないのよっ！？

「カルラは補習決定だね。ダンジョンを出た後に火の特性についてのレポートを纏めるようにね」

「え〜」

「え〜、じゃないの。今のままだと中級ダンジョンでも踏破はきついから気合入れて火を理解するように！」

「クリストフ君、少し厳しいかなって……」

「ペロンは優し過ぎるの！ その優しさがカルラを殺すことになるんだよ！ 今のカルラがこの先に進む方が危険だからしっかりと火のことを勉強させないと！」

くそ〜、覚えていろよ〜。必ず火魔法の極意を掴んでみせるんだから！